

「中高英語授業での継続的コミュニケーション活動の運営法」

Cumulative Recurrent Communication Activities in High School English Classes

三浦 孝

Takashi MIURA

The purpose of this paper is to propose recurrent communication activities for high school English classes that develop students' abilities to give presentations successfully and at the same time participate in presentations as active audience members. For this purpose I propose four types of activities that take only about 10 minutes each and that can be employed cumulatively across 10 or more lesson periods. Such cumulative recurrence of activities is efficient and effective. By using the same activity design, teachers can reduce the time required for preparing students for new activities, and students come to perform better in familiar activities.

In Section 1 Presentation Activities are proposed in which students give mini-lectures to their peers for about 10 minutes. It is necessary for language teachers to distinguish between giving a presentation and giving a public speech. In the latter, emphasis is placed on eloquence and rhetoric, and little speaker-audience interaction is required. In the former, however, there is greater emphasis on accurate transmission of facts and information, and active interaction between the speaker and the audience is an essential element. This entails different approaches for training students to give presentations and preparing them to give speeches.

In Section 2 Teacher's Small Talk Activities are proposed based on a study conducted by Adachi Tomoko in her junior high school. In these activities, the teacher begins his/her class by

giving a 10-minute “small talk” on topics of interest to students. The purpose is to model effective presentation skills by really talking to the audience, interacting with the audience, paraphrasing difficult words in simple words, and checking their understanding.

In Section 3 Students’ Small Talk Activities are introduced based on a study conducted by Fujisawa Suguru in his junior high school. It is not always easy to rely on students to make small talks worthy of listening to, nor is it easy to leave to students the responsibilities of getting their messages across and endeavoring to understand their peers’ talks. To address these challenges, a four-cycle procedure is proposed in which each student speaks for a purpose, listens for a purpose, summarizes the talk, and reports the talk to the original speaker.

In Section 4 Picture Description Activities are proposed based on a study conducted by Yokoyama Hiroshi in his junior high school. For about 10 minutes at the beginning of each class, the teacher shows a picture to the class and directs students to imagine what is happening in the picture. Students are then asked to describe the scene in English. Student work is collected, commented on by the teacher, and returned to students the next class. Also, impressive descriptions are selected and published in the English Class Journal distributed among students each week.

Finally, the need for continuously training students to interact with one another actively as presenters and audience members in English presentations is discussed, recognizing that such skills will contribute to students’ abilities to give successful presentations in business and at academic conferences in the future.

はじめに

英語コミュニケーション能力を育成するためには、生徒が教室で意味ある目的のために英語を使うコミュニケーション活動が有効だとされる。その際に問題となるのが、活動への生徒と教師の「慣れ」の確保である。どの活動にも、活動手順の説明が必要であるから、新しい活動を導入する際には、手順説明に時間を費やすことになる。したがっていくら良い活動だからといっても、短期的にめまぐるしく活動を入れ替えることは、時間のロスと不消化につながる。同じコミュニケーション活動にバリエーションを加えながら継続的に運用すれば、生徒にも教

師にも活動の慣れが生まれ、改良の機会が増え、短時間（10 分程度）でも密度の濃い活動が期待できる。

本稿では、このような観点から、少なくとも 10 回程度は継続的に運用可能なコミュニケーション活動の具体例を 4 種類紹介する。なお、ここで扱う「コミュニケーション活動」とは当然、機械的ドリルや、伝達価値やニーズを伴わないディスプレイのための言語活動ではなく、発信者と受信者の間で、自分や相手にとって価値のある意味を伝達する活動を意味する。

継続的活動の意義

継続的活動を行うことによって、次のような効果が期待できる：

- (1) 同じ活動を繰り返すので、活動の事前説明の時間が節約できる。
- (2) 同じ活動を繰り返す中で、生徒が次回の見通しを持って、工夫して活動に臨むようになる。
- (3) 同じ活動を繰り返す中で、教師がアクションリサーチ的に活動の問題点を見出し、改良を加えられる。

こうした条件を満たす活動として本稿では

1. プレゼンテーション活動
2. 教師による small talk
3. 生徒による small talk
4. Picture Description

を取り上げる。このうちの 2 は中学校教師の足立智子氏（2001）、3 は藤沢英氏（2006）、4 は横山尋司氏（2003）の研究を参考に、筆者のアイディアでまとめたものである。この 3 名の先生方には、その旨快くご了解いただいたことを、ここで感謝申し上げたい。

コミュニケーション活動が効果を生むための枠組み

いくら生徒が好むからといっても、年間指導計画や本時の授業目標と関連づけのない、単発的活動を乱発しても効果は薄い。コミュニケーション活動が効果を生むためには、次のような枠組みに位置づけることが必要である：

- (1) 活動を、英語科の中・長期的な到達目標の中に位置づける。
- (2) 生徒がその日の活動のタスクを達成したかどうかを確認するステップを、指導手順に入れる。やりっぱなしにしない。
- (3) 優れた生徒作品をクラスに還元することにより、全体の質を上げる。
- (4) 生徒に授業ジャーナルを書かせてフィードバックを確保し、活動に対する生徒の反応を掌握する。また、教師の授業ジャーナルで、活動の問題の発見と解決の足跡を記録する。

1. 英語プレゼンテーション

プレゼンテーション活動とは：

ここで扱う「プレゼンテーション」とは、「ミニ・レクチャー」とも呼ぶべきもので、発表者がクラスメートに役立つ情報や状況・出来事について、客観的に相手にわかりやすく口頭発表する活動を言う。自分の主張や意見よりも客観的事実の伝達を主眼とし、雄弁さ(eloquence)よりも明快さを優先する点で、スピーチとは異なる。また、終始発表者のみが話し続けるスピー

チとはちがって、プレゼンテーションでは発表者が聴衆と対話しながら話を進めることが求められる。したがってプレゼンテーション活動では、聴衆の側のプレゼンテーション参加能力すなわち「聞き・反応する能力や態度」の開発をも伴う必要がある。

プレゼンテーション活動で目指す力：

将来、学会・会議・商談などにおいて、聴衆が求める情報を、視聴覚情報・配布資料をも伴って口頭発表し、聴衆と質疑応答や意見交換を行う力の基礎を育てる。また、聴衆としてプレゼンテーションに参加し、発表者との間で質疑応答や意見交換を行う力の基礎を育てる。

<発表者に育てたい力>

- (1) 原稿をではなく、聴衆を見て話す態度・能力を養う。そのためには、発表準備で文依存の準備方式をやめ、キーワード単位の準備方式に切り替える。

文依存の準備方式とは：従来のスピーチ準備で用いた {「日本語原稿作成」→「原稿の英訳」→「英訳した英文の暗唱」→「暗唱で発表」} の流れ

キーワード単位の準備方式とは：{「英語キーワードでブレインマップの作成」→「ポスターの作製」→「ポスターを指差し説明する形で発表する」} の流れ

その理由は、入念に原稿を書きそれを暗唱して本番に臨むという文依存の準備方式は、eloquence や rhetoric を重視したスピーチのための準備方式であり、情報の伝達と聴衆との対話を重視するプレゼンテーションの準備にはふさわしくないからである。大多数の生徒にとって、従来の準備方式が強い原稿依存と硬直した話し方を生み、その結果として本番で原稿を棒読みすることにつながっていると考えるからである。

- (2) 一方的にまくしたてるのではなく、聴衆とのインタラクション（質疑応答）を図りながら話す態度・能力を養う。
- (3) 聴衆が知らない語句は、わかりやすく言い換えて伝える態度・能力を養う
- (4) すべての部分を平板に話すのではなく、重要な部分をゆっくり、大きく発話し、必要ならば繰り返し聞かせる態度・能力を養う。
- (5) "Do you understand?"などの表現を用いて、聴衆の理解を確かめながら話す態度・能力を養う。

<聞く側に育てたい力>

- (6) 発表者の問いかけに対して積極的に応答を返す態度・能力を養う。
- (7) 自分が話を理解しているかどうかを発表者に伝える態度・能力を養う。
- (8) わからない部分を発表者に聞き返す態度・能力を養う。
- (9) 話題に関して、発表者に関連質問をして話を活性化する態度・能力を養う。

具体的活動例

ここでは中学 1 年生用に、自作ポスターを使った継続的プレゼンテーション活動を紹介する。1 回の所要時間約 10~15 分で、連続 4 回で 1 サイクル完成するとし、その 4 サイクル分を紹介する。各サイクルの基本設計は表 1 のとおりである。

[表 1 : 各サイクルの基本設計]

サイクル	実施時期	テーマ	用いる言語事項
サイクル 1 (1 回~4 回)	中学 1 年 5~6 月	This Is Me.	be 動詞を使った文。ただ文でなく 単語で話してもよしとする。
サイクル 2 (1 回 ~4 回)	中学 1 年 7 月~9 月	I Like This Country.	一般動詞の文を加える。
サイクル 3 (1 回 ~4 回)	中学 1 年 10 月~11 月	Let's Go There.	Can を用いた文を加える。
サイクル 4 (1 回 ~4 回)	中学 1 年 12 月~2 月	My Old Picture	過去形の文を加える。

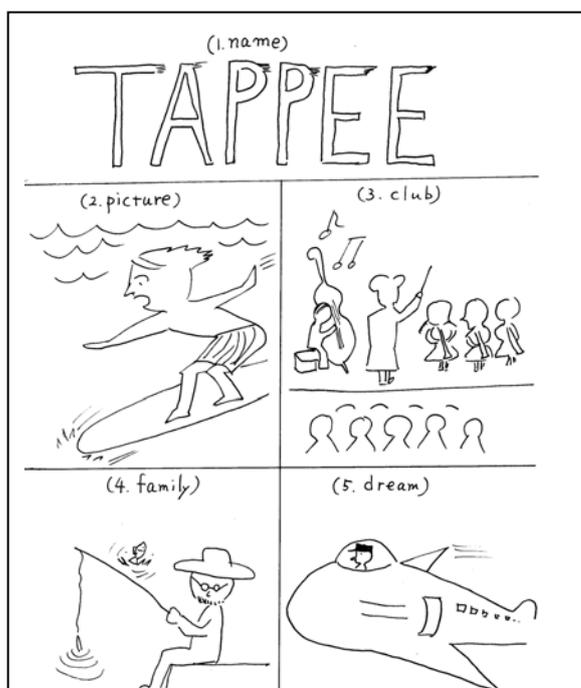
1.1 サイクル 1 (中学 1 年 5~6 月用) のプレゼンテーション

この時期は、多くの検定教科書が動詞を be 動詞に限定しているのを考慮して、be 動詞のみを用いる。

サイクル 1 の最終到達点：

‘This Is Me’ (これが私です) のテーマで、図 1 のような自作ポスターを聴衆に見せながら、下記の発表例のような発表を行えるようにする。なお、発表例に質問が多く含まれている理由は、それまでの 1~3 回目の積み上げ (表 2 参照) の上で話しているからである。

[図 1 : サイクル 1 のポスター例]



(サイクル 1 : 4 回目発表例)

Hello, class. Who am I?

- <ポスターの(1)を指さして> Yes, I am Tappee.
 < (2) を指さして> This is my picture. What is my hobby? Yes, it is surfing.
 < (3) を指さして> Am I in the softball club or the brass band club? Right, I am in the brass band club.
 < (3) の指揮者の絵を指さして> This is our teacher. He is Mr. Hattori.
 < (4) の絵を指さして> . Is this my father.or my grandfather?
 Yes, he is my father. His name is Shigeru. He is 62 years old.
 < (5) の絵を指さして> This is my dream. My dream is a pilot. That is all. Thank you.

サイクル 1 での発表内容は、表 2 のように回を重ねるごとに積み上げる方式をとる：

[表 2：サイクル 1 の内容の積み上げ方]

回数	ポスター記入箇所	どのような絵を記入するか
1	box(1)	自分はクラスメートに「どう呼ばれたいか」
	box(2)	自分の似顔絵と、自分の特徴を示す物
2	box(3)	自分の所属クラブ
3	box(4)	自分の家族または友人、ペット
4	box(5)	自分の将来の夢や、あこがれの人物

つまり、1 つのプレゼンテーションを一度に完成させるのではなく、4 回に分けて内容を徐々に積み上げてゆく（この積み上げ方式は稲岡(1995)を参考にした）。これによって発表者には慣れが生まれ、聞き手には十分な対話のチャンスが生まれる。以下に、各回ごとの展開を述べる。

前準備：

- 生徒各自に、四つ切ボール紙（25.5cm×30.5cm）を配る。これにキーワードや絵を記入してプレゼンテーション用のポスターにする(図 2 参照)。ポスターは教室後部からも見えるよう大きく描く。
- Box(1)(2)に、名前と絵を記入する。
- 下記の発表例（1 回目）にならい、絵を指さしながら、メモを見ないで英語で自分を語れるよう準備してくる。

[図 2：ポスター用紙]

(1 回目発表例)：

“Hello, class. I am Tappee. This is my picture. My hobby is surfing. That is all. Thank you.”

(1)	
(2)	(3)
(4)	(5)

第 1 回：(所要時間 10 分)

- 生徒 4 名のグループで活動する。用意してきたポスターを見せながら、1 人 1 分ずつ、上記の発話例 1 のようにグループ員に話して聞かせる。話す際には、
 - グループ員全員を見て話す、

- (2) メモや原稿は一切見ない（見た場合は失格とし、やり直させる）、
- (3) 重要な語は大きく・ゆっくりと発音し、2 度繰り返して話す、
- (4) 未習語を使うときは、その語のスペリングを別紙に綴って見せながら、ジェスチャーや既習の語で言い換えて説明する、
- (5) ”Is it clear?”を用いて聞き手の理解をチェックし、“Yes”の返事がなければもう一度説明をしない

の 5 点を励行する。特に(2)の「メモから読むこと禁止」のルールは最初から厳格に徹底したい。ここを甘くすると、原稿から読み上げる習癖が蔓延して、活動は朗読会に墮してしまふ。

b) 4 人が話し終えたら、ポスターを互いに交換し、他の生徒のポスターを持って話を順に再話してみせる。話しながら “Am I correct?”と内容を確認しながら行う。これが、「発表者は本当に聴衆に伝えたか」、「聞き手は本当に発表を理解したか」の達成確認プロセスであると同時に、他生徒のポスターをもとに即興的に話す訓練ともなる。

c) 教師は上記 a)、b)の活動中に、上手にできている生徒やグループを見つけておき、彼らに教壇に出て発表してもらふ。

第 2 回：(所要時間 10 分)

第 2 回は、前回作ったポスターの box 3 に自分のクラブ活動の線画を描き加えてくる。ただし線画は入念なものではなく、話すためのヒントになるような簡単なものとどめること。具体的な活動手順は、第 1 回の a)~c)と同じであるが、次の変更点を加える。

h) 新しいグループで行う。

i) 先回既に話した部分については、聞き手との問答形式で話しをすすめる。

[発話例 2]:

Hello, classmates. Who am I? Yes, I am Tappee. This is my picture. What is my hobby? Yes, it is surfing. I am in the brass band club. This is our teacher. His name is Mr. Hattori. He is a kind teacher. That's all. Thank you.

第 3 回、第 4 回もこれと同様に、それぞれ絵に 1 box ずつ絵を追加して、話をふくらませ、既説明部分は問答形式を用いて、新しいグループで行う。

これまでの 4 回の中に、生徒は先述の目標の

- (1) 原稿ではなく、聴衆を見て話す、
- (2) 聴衆とのインタラクションを取りながら話す、
- (3) 聴衆が知らない語句は、わかりやすく言い換えて伝える、
- (4) 重要な部分をゆっくり、大きく発話し、必要ならば繰り返し聞かせる、
- (5) ”Do you understand?”などの表現を用いて、聴衆の理解を確かめながら話す、
- (5) 聴衆は発表者の問いかけに応答を返す、
- (6) 聴衆は自分が話を理解しているかどうかを発表者に伝える、

という、プレゼンテーションの基礎能力を訓練することができる。

1.2 サイクル 2 (中学 1 年 7 ~ 9 月用) のプレゼンテーション

サイクル 2 では ‘I Like This Country’ と題して、生徒 1 人が世界のどれか 1 国を担当し、その国の概要について英語で発表する。活動の基本設計はサイクル 1 と同様だが、次のようなグレードアップを加えてゆく。

<発表者>

- (1) Like, have, go, come, look, live などの一般動詞の現在形を加えて表現の幅を拡げる。
- (2) 冒頭で主題を語り、次いでそのサポート部分を続ける談話構造を持った発表を行う。

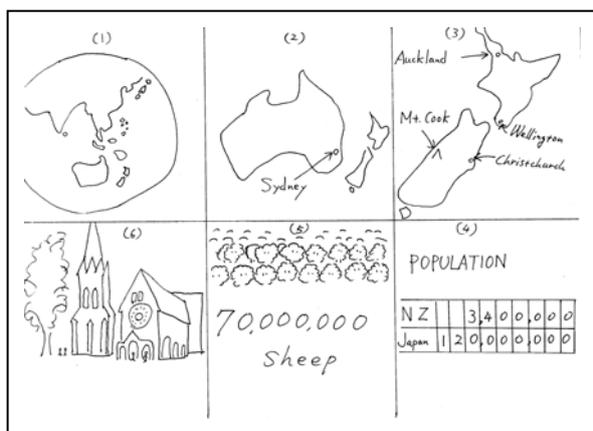
<聞き手>

(3) グループの机前におはじきを配り、話者に対して自分が 1 つフィードバックを返すごとに、おはじきを 1 つ取ってよいことにする。活動の最後に、自分が取ったおはじきの数を報告させる。フィードバック表現は、基本的なものを模造紙に大きく書いて常時教室の壁に掲示し、必要な時に参照できるようにしておく。

サイクル 2 の最終到達点：

図 3 のような自作ポスターを見せながら、右下発表例のような発表を行えるようにする。なお、発表例に質問が多く含まれている理由は、1～3 回目の積み上げの上で話しているからである。

[図 3：サイクル 2 ポスター例]



(サイクル 2：4 回目発表例)

<box(1)を指して> Hello, class. Welcome to New Zealand. Look at Map One. What is this ocean? Yes, it is in the South Pacific Ocean.

<box(2)を指して> Look at Map Two. What is this big country? Right! It is Australia. New Zealand is next to Australia. It has two big islands.

<box(3)を指して> Look at Map Three. What is the capital of New Zealand? Yes, it's Wellington. It's here on the map.

<box(4)を指して> Look at this box. How do you read this number? Three million four hundred thousand. Right! Three million four hundred thousand people live in New Zealand. New Zealand has a population of 3,400,000.

<box(5)を指して> Look at this box. How do you read this number? Seventy million, yes. What number is this? Seventy million sheep live in New Zealand.

<box(6)を指して> Look at this picture. It is Christchurch. Christchurch is a very beautiful city in South Island. I like New Zealand. That's all. Thank you.

サイクル 2 は、10～15 分間の活動を 4 回積み上げて完成する。その積み上げ方は下表のようになる：

[表 3：サイクル 2 の積み上げ方]

回数	ポスター記入箇所	どのような絵を記入するか
1	box(1)	広域世界地図上で自分が紹介する国の位置を示す
	box(2)	もう少し close up した地図で、近隣国との位置関係を示す。 国内地図で、主要都市を示す。
	box(3)	
2	box(4)	その国の人口を示す。
3	box(5)	その国の産業を示す。
4	box(5)	その国の名所か魅力を 1 つ示す。

サイクル 1 と同様、新しい 4 人のグループで活動し、前回までで話した部分を問答形式で話した上で、今回の部分を追加して話す。発表者が話し終えた後にポスターを交換して他メンバーの発表を再話する。

1.3 サイクル 3（中学 1 年 10～11 月用）のプレゼンテーション

サイクル 3 では、'Let's Go There!' のテーマで、クラス遠足に行くとしたらどこがよいかをクラスに提案する内容とする。活動の基本設計はサイクル 1、2 と同様だが、次のようなグレードアップを加えてゆく。

<発表者>

(1) B4 サイズポスターの仕切り方は、各自の都合の良いように自由とする。ただし遠くから見やすくするため、ボックスの数は 8 以下とする。

(2) First、 Second 等の discourse marker を用いて、話の結束性を高める。

<グループ員全員>

(3) 4 人の発表が済んだら、どの遠足プランが良いか、グループ内の一位を決める。次に、選んだプランに 4 名が改良を加えてグループプランとし、次回に全クラスの前でプレゼンテーションを行いプランをアピールする。

サイクル 3 の最終到達点：

図 4 のような自作ポスターを見せながら、'Let's Go There!' のテーマで、右下発表例のような発表を行えるようにする。なお、この発表例に質問が多く含まれている理由は、1～3 回目の積み上げの上で話しているからである。

(サイクル 3：4 回目発表例)

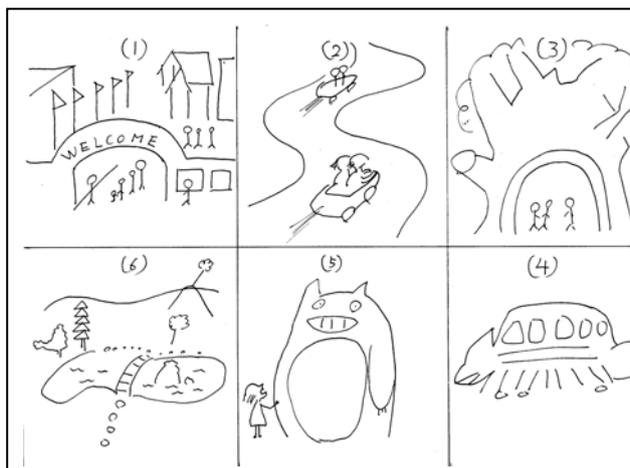
Hello、 class.

<box (1)を指さして>Please look at box one. Do you know this place? Yes, it is Yamate Amusement Park in Higashi Machi. Let's go there on Sunday. Everybody enjoys the place.

<box (2)を指さして>First, we can drive a go-cart there. Do you like Go Cart? Raise your hands. Many say yes. Good. How long is the course? Do you know? The course is 600 meters long.

<box (3)を指さして>Second, we can visit Totoro House there. Do you know Totoro? Yes, Miyazaki Hayao’s Totoro. Do you like Totoro? Raise your hands. Thank you. A lot of students like it.

[図 4 : サイクル 3 のポスター例]



<box (4)を指さして>What is this? Yes, it is Cat Bus. We can get on a big Cat Bus in Totoro House. It is fun.

<box (5)を指さして>What is this? Right! It is a big Totoro Doll. Let’s touch it.

<box (6)を指さして>Third, we can visit a beautiful Japanese garden there. Let’s have a picnic in the garden. Let’s have a picture together. That’s all Thank you.

(注 : Yamate Amusement Park は、例示のために仮想したものであり、実在はしません。)

サイクル 3 は、10～15 分間の活動を 4 回積み上げて完成する。ポスターの枠組みを自由とするため、決まった積み上げ方を指定はしないが、原則的に次のような Topic Sentence+Support の構成をとる。

[表 4 : サイクル 3 の積み上げ方]

回数	ポスター記入箇所	どのような絵を記入するか
1	box(1)	「遠足には～へ行きましょう」といった、提案をする。
	box(2)	その場所を推選する第 1 の理由を述べる。
	box(3)	その場所を推選する第 2 の理由を述べる。
2	box(4)	更に補足する。
3	box(5)	更に補足する。
4	box(5)	更に補足する。

1.4 サイクル 4 (中学 1 年 12～2 月用) のプレゼンテーション

サイクル 4 では、‘My Old Picture’ というテーマで、生徒が自分の昔の写真を拡大コピーしてポスターに張り、それを見せながら過去の意味深い思い出を語る。なお、使用する写真の枚数は 2 枚以内に限定する。これは、写真が多いと、1 枚 1 枚を丁寧に説明することなく、ただ単に写真をめくってゆくだけの発表になるからである。活動の基本設計はサイクル 3 と同様だが、次のようなグレードアップを加えてゆく。

<発表者>

(1) 過去形を加えて、表現の幅を更に広げる。

<聞き手>

(2) 発表者に対して、関連質問を出せるようにする。次のような関連質問の切り出し方を掲示し、質問を作る援助とする。

What did you---? Which did you---、 ---or ---? Where did you ---?
When did you---? Why did you---? Who ---?
How often did you---? How long did you ---?
Was it/he/she ---? Were you/they---? Was/Were there ---?

これによって、「わからない部分を発表者に聞き返す」「話題に関して、発表者に関連質問をする」というプレゼンテーション参加のための態度・能力を開発する。

1.5 中学 2 年生以降のプレゼンテーション：グレードアップの方向

中学 2 年生のプレゼンテーションでは、1 年次の「私中心」の話題から、やや客観性を増したテーマに移行する。また、話す分量が増えてくるので、グループ内で 1 回に 1 人が発表する方式をとる。4 回でメンバー全員が発表したら、グループで最も良い発表を選び、それをグループ作品として改良して、全員の前で発表する。

中学 3 年プレゼンテーションでは、更に客観性と情報量を増したテーマを扱う。特に奨めたいのは、各グループが分担して教科書のレッスン内容に関する関連情報を調べて、それを英語でわかりやすくクラスに説明する形のプレゼンテーションである。そのために新学年開始前に教師が教科書 1 年分の話題を事前把握し、関連情報が生きるレッスンをリストアップする。例えばマザー・テレサ、キング牧師、チャップリン、杉原千畝、地球環境問題などを取り上げたレッスンでこれを行えば、授業の内容と継続的コミュニケーション活動が有機的に一体化して、活動とテキストの相乗効果が期待できる。4 月早々、各グループがどのレッスンを担当するかを決め、発表時期の目安も予告しておく。

2. 教師による small talk

教師による small talk の研究としては、筆者の知る範囲では浜松の足立智子先生 (2001) が中学 1 年生を対象にして一年間行った small talk のアクションリサーチ的研究 (2001) が参考になる。本項は、この実践を参考にして筆者が手を加えてまとめたものである。

教師による small talk とは

毎授業の開始時に 5~10 分ほど、対話をはかりながら教師が英語で生徒に身近で興味深い小話を話して聞かせる活動である。これは「さあこれから英語を勉強するぞ」という気持ちにさせる導入の効果と共に、教師が生徒に英語での小話の仕方の実例を見せるという目的がある。身近な話題を用いれば、生徒が持つ背景知識によって話の意味を推測することが容易であり、英語を聞いて理解できたという達成感を与えることができる。ただし、授業での継続的活動として用いる際には、その効果を確実にするため、

- ア) 教師がその日の思いつきでトピックを選ぶのではなく、あらかじめ作成したプランに従って計画的にトピックを選び、
- イ) 生徒とのインタラクションを生む表現を計画的に使用し、

ウ) 生徒が聞き取ったかどうかを確認するプロセスを盛り込んで達成を確認し、
エ) small talk を録画（録音）して教師が事後に反省を行う、
ことによって、質をモニターし高めてゆくことが必要である。

教師による small talk で目指す態度・能力

- (1)文字に頼らずに英語を聴いて理解する力を養う、
- (2)「必ずしも話の全部を理解しなくても大意が理解できればよい」、という *ambiguous tolerance* の態度を養う、
- (3)英語での対人コミュニケーションの典型としての small talk の模範を示すことにより、将来生徒自らが small talk 活動をするための素地を養う、
- (4)教師が、生徒に質問し対話しながら話すことによって、聞き手とのインタラクションの取り方のモデルを示す、
- (5)インタラクションにより、生徒の発話を引き出し、発話力を養う。

具体的活動例

教師が、生徒と問答形式で英語で小話を話して聞かせる。理解を助けるため、話に関係のある実物、絵、板書、写真を見せながら行ってもよい。

2.1 話の内容

話の内容としては、中学での導入期は、全員が最近体験した学校行事 (school trip、sports meet、festival、school lunch) や、ポピュラーなアニメ(サザエさん、ドラえもん、ちびまるこちゃん、ムーミン等)が良い。

生徒がこの活動に慣れてきたら、下記のようなバラエティのトピックが考えられる。いずれにしても、話題は (ア) あまり深刻にならず明るい話題で、(イ) 生徒が多少とも事前知識を持っている話題、が望ましい。

- (1)最近の明るいニュースやイベントの話題 (例：オリンピック、ワールドカップ、福原愛選手、アザラシのタマちゃんやナカちゃん、さつきとメイの家、花火大会など)
- (2)その日の授業内容と関連ある話題
- (3)タウン情報 (花の名所、便利な施設、おもしろい店、町の顔[校医さん、駅長さん]、学校の顔[給食のおばさん、用務員さん])
- (4)教師の旅行小話や、おかしな失敗談。

2.2 問答形式

生徒との問答形式をとるためには、次のような理解チェックや関連質問を多く問いかけることが重要である：

“Do you know this word?” “Say this in Japanese.” (語の知識を問う)

“Who is this man?” “Have you ever seen this?” “Who knows about this?” (事前知識の確認)

“Do you understand? Yes or No?” (話の理解チェック)

“Do you like it?” “Which do you like better?” “Who likes it?” “You want it? Raise your hands.”(事物への好みや希望を問う)

“What do you think?” “Do you agree?” “Why do you think so?” (意見とその理由を問う)

2.3 生徒の達成の確認

ただ単に教師が英語をしゃべっているにすぎず、生徒はよそ事をしている、といった時間に墮落させないためには、small talk を聞く側の生徒にタスクを与えて、聞き取りの達成を確認することが有効である。そのためには small talk 終了後に下記のような「聞き取りメモ」を配って記入させ回収するとよい。ただし、このようなものを書かせる際には、あまり大量に書かないように、記入欄を狭くしておくことと、用紙を small talk 終了後に配ることが肝心である。そうしないと生徒は small talk の最中から、対話に参加せずにメモを書くことに汲々とし、対話という本来の目的を忘れてしまう。

聞き取りメモ

No. () Name: _____

1. 今日の話で聞き取れたことを日本語で書きましょう。感想もあつたら書きましょう。
2. 今日の話で記憶に残った英語を 1 項目書きましょう。

3. 生徒による small talk

生徒による small talk の研究としては、筆者の知る範囲では静岡の藤沢英先生が中学 1 年生を対象にして一年間行ったアクションリサーチ的研究 (2006) が参考になる。本項は、この実践を参考にして筆者が手を加えてまとめたものである。

生徒による small talk とは

生徒がペアやグループで 10 分間程度、英語で身近な話題について情報や意見を交換する活動を言う。ただし、こんな単純な仕組みだけでは、繰り返して行ううちに話がマンネリ化して、話し合う意義が無くなってしまう。授業での継続的活動として成果を生むために、

- ア) small talk の内容を、面白く聞く価値のある内容に高める工夫と、
- イ) 話し手と聞き手の双方に、理解させ・理解する自己責任を持たせる工夫、
- ウ) 達成を確認する工夫、

を仕組む必要がある。これについては、以下で詳しく述べる。

生徒による small talk で目指す態度・能力

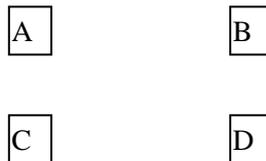
- (1) (話者が) 相手と対面して、相手の理解を確認しながら話す態度・能力、
- (2) (聞き手が) 話者の言うことを理解するために、フィードバック表現を駆使して、話者を励まし・コントロールする態度・能力
- (3) (聞き手が) 聞いた話を整理して、他者に口頭で要約して伝える能力、
- (4) (聞き手が) 聞いた話を整理して、他者に筆頭でレポートする能力。

具体的活動例

[図 5 : 小グループ図]

3.1 活動形態

右図のように、4 名の小グループ単位で活動する。
 <準備段階>宿題として、次回の small talk のトピックを予告し、用紙に talk の draft を書かせる。なお、文依存から脱却させるため、draft はキーワードを線で結んだブレイン・マップの形式を取るよう指導するとよい。



- (1) 授業開始時、small talk を始める前にスピーチ draft を回収する。(Draft を持って話すことを許したら、原稿依存の話し方から脱却できない。)
- (2) 生徒[A と B]、[C と D]が本日のトピックで互いに small talk をする (1. 5 分ずつ、合計 3 分)。相手の言ったことを、あとで他者に伝えられるように記憶しながら聞く (簡単なメモを取ってもよい)。
- (3) A は D と、B は C と組んで、互いにさっき聞いた内容を、整理して相手に話して聞かせる。(話す準備に 2 分、互いに 1. 5 分ずつ話す、合計 5 分)
- (4) C は、B から聞いた話をまとめて、report を書く。それを本人 (A) に見せ、内容が正しく伝わっているか添削してもらう。同様にして、
 - A は、D から聞いた話を report に書いて本人 (C) に見せて添削を受け、
 - B は、C から聞いた話を report に書いて本人 (D) に見せて添削を受け、
 - D は、A から聞いた話を report に書いて本人 (B) に見せて添削を受ける (2 分)。
- (5) 教師は添削を受けたレポートを回収して達成をチェックする。

3.2 small talk の内容を、面白く聞く価値のある内容に高める工夫

- (1) 用いたい話題の希望を調査して、生徒の好きなトピックを用いる。基本的には、生徒が自分を語れる機会とするとよい。
- (2) 同じトピックを繰り返し用いれば、慣れが生じて話しやすくなる一方で、話の内容がマンネリになる傾向もある。適当な時期にトピックを変更すること。
- (3) 例えば活動入門期：{「TV programs」→「Songs」→「favorite food」→「文型 1 つ指定 (例 "be going to")」} を 4 セット。
 次いで：{「sad story」→「funny story」→「big news last week」→「文型 1 つ指定」} を 4 セット
 次いで：{「town information」→「heart-warming story」→「my dream」→「free topic」} を 4 セット
 次いで：{「I admire him/her」→「kwaidan(怪談)」→「my favorite place」→「free topic」} を 4 セット
 なお、各セット間にメンバーチェンジを行い、新しい相手と行うようにする。

3.3 話し手と聞き手に自己責任を持たせる工夫

上記の手順で説明したように、聞き手には、今聞いた友達の small talk の summary を、英語で次の生徒に伝える任務を負わせる。これによって、聞く側にはしっかりと聞き取る自己責任が生まれ、また話す側には相手に内容をよく理解させる自己責任が生まれる。特に、small talk

の話し手は、3 ラウンド目には話しが巡り巡って自分にレポートとして返って来るので、伝達の成否が一目瞭然にわかる。

3.4 藤沢実践で見えてきた、指導の重点

藤沢氏は 2005 年 2 月～2006 年 3 月までの、生徒による small talk の実践を振り返り、生徒が会話を持続させる力が成否の鍵をにぎると報告している。会話の持続のためには、conversation strategy を教え、聞き手が話者から聞きだす力を育て、よりよく伝えるために発音を向上させ、辞書で自分の求める語をみつけられるようにする指導が必要だと結んでいる。特に、自分の求める語を和英辞典で調べる際には、(1)単にある訳語に飛びつくのではなく、例文を見て実際の使い方を調べる、(2)みつけた訳語を次に英和辞典で引いてみて、本当にその文脈で使えるかどうかを確認する、プロセスを経るよう指導する。

4. Picture Description

絵を英語で説明する継続的活動としては、筆者の知る範囲では横山尋司先生が長年継続実践しておられる Picture Description (2002) が参考になる。本項は、横山実践の概要を要約して紹介したものである。

Picture Description とは

授業開始時の 5～10 分間、教師が用意した 1 枚の絵 (かなり自由な解釈を許容するもの) を見せて、その絵の状況を英語で作文し、提出させる。提出作品にはコメントを付けて返すと共に、英語の教科通信に名作を紹介して生徒に配布する。

Picture Description で目指す態度・能力

- 一次的目標： 絵をきっかけとして、自分の発想で、自分の持つ言語能力を creative に活用して、英語で表現する。
- 二次的目標： クラスメートの作った作品から、発想や表現方法を学びあう。

具体的活動例

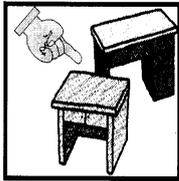
- (1) 始業時に課題絵が入った B6 サイズ (128×182 ミリ) の用紙を配布する。
 - (2) 生徒は絵を自由に解釈し、その絵の状況について英語で描写する。(英文が思いつかない場合には、日本語でも可とする)
 - (3) 用紙を回収して教師の添削を加え、後日返却する。(添削は、大筋で意味が通れば○を与え、誤りや通じない箇所は訂正を施す。日本語で書かれたものは英文に直して与える。)
 - (4) 月 2 回程度発行する教科通信に、生徒の名作を掲載する。最優秀賞、ナイストライ賞、ユニーク賞、グッドアイデア賞、ギミアブレイク賞など、異なる賞を設けて、どの生徒でも何らかの賞が取れるように工夫する。なお、教科通信の実物が横山先生のホームページに載っているので参照されたい (<http://page.freett.com/yokochanman2/>)。)
 - (5) 年度末に、1 年分の優秀作品集を製本し、翌年の生徒が閲覧できる場所に展示しておく。
 - (6) 定期テストに、Picture Description で扱った課題の中から出題する。
- なお、上記の(1)(2)のプロセスは、時間節約のため宿題として与えておいてもよい。

4.1 中 1～中 3 の標準的タスク

<1 年生>

1 年生では、課題絵について 1 文を作成させる。決まった解釈ができる絵を使用する。場面説明の日本語を添える。

[図 6 : 1 年生用課題の例]



この絵の中の指を指している人が、絵の中の物についてあることを聞いたら、“No.” という答えが返ってきました。さて、指さしている人はなんて聞いたのでしょうか。

[生徒作品の例]

Is this a chair?

Is this your desk?

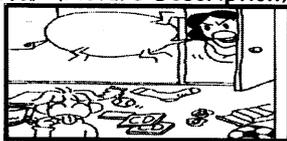
Do you want this desk?

<2 年生>

2 年生では、課題絵について 1～2 文を作成させる。やはり決まった解釈ができる絵を用いる。場面説明の日本語を添える。

[図 7 : 2 年生用課題の例]

《表現》(Picture Description) 次の絵を与えられた条件に従って英文にしなさい。



《条件》 (各3点)
お母さんがあなたの散らかっている部屋を見て怒って言いました。さてなんと言ったのでしょうか。

[生徒作品の例]

Clean your room at once! You have no dinner tonight!

What a messy room! Why don't you clean it?

How many times did I tell you? You're a bad boy.

<3 年生>

3 年生では、多様な解釈が可能な絵を用いる。場面説明は与えない。

[図 8 : 3 年生用課題例 1]

[図 9 : 3 年生用課題例 2]



[生徒作品の例]

課題例 1

- He hasn't taken a bath for two years. But today he made up his mind to take a bath at last. (最優秀賞)
- He is taking a bath now. But he has never been to SENTO, public bath. So he has a dream. "I want to take a big bath." (Good Idea 賞)
- He was taking a coffee bath. Because he likes a strange bath. (Unique 賞)

課題例 2

- She doesn't know how to cook. But she must study how to cook. Because she will get married in spring. (最優秀賞)
- She hopes that her daughter will be a good mother who can cook dinner well. (Nice Try 賞)
- Mother is poor at cooking. So her daughter teaches cooking to her. (Unique 賞)

4.2 発展的バリエーション

以下に紹介するのは、Picture Description の発展形である。

(1) 条件付 picture description

これは、ある文法項目の使用を指定して書かせる方式である。下記にその課題例と、生徒の作品例を載せる。

[図 10:条件付 picture description 例]

3年生の1学期中間テストに出題した問題

[7] (Picture Description) 次の絵の中から好きな絵を3種類選び、それらの絵を使って、
 1.過去進行形、2.不定詞(to+動詞の原形)、3.現在完了形(have+PP)を使って英文で表しなさい。また、必ず5語以上の英文で答えなさい。
 注:選んだ絵の記号も記入すること。また、名前等は自由に決めてよい。(各3点)

生徒の作品例

使用した絵：エ 説明文：I have just finished eating school lunch. Now let's play outdoors.

使用した絵：カ 説明文：Kaori likes to sing Karaoke. She sings very well.

使用した絵：ク 説明文：I was jogging in the City Park with Emi and Jun at six o'clock.

(2) 絵のない picture description

これは、絵の代わりにある状況を日本語で与え、その状況でどのような発言をしたらよいかを、英語で作るタスクである。状況説明の例と、生徒の作品例を下記に紹介する。

状況説明の例 (3 年生 2 学期用)

あなたの大切な友達がずっと前から腕時計を欲しがっていました。そこで、あなたは友達を喜ばせようと内緒で腕時計を買って、誕生日にプレゼントしました。さて、あなたは何と言って手渡すでしょうか。(注) Happy birthday to you. や It's a present for you. 以外で考えるようにすること。

生徒作品の例

- You have wanted this watch, haven't you?
- This watch will make you very happy.
- It is very hard for me to buy this watch. But I want to see your smile.

その他にも、横山は Picture Introduction(絵を見て自己紹介)や、Picture Conversation (1 枚の絵を見て、二人でその状況を会話してみせる) を実施している。このように、Picture Description は継続的に使用しても、絵を取り替えることによって飽きのこない活動で、生徒の学習進度に応じてグレードアップが可能であり、基本形をマスターしておけば様々なバリエーションも可能である。なお使用する絵は、学習参考書やイラスト集などで、見えそうなものを見かけるたびにスキャナーで読み込んでストックしておくといよい。

4.3 生徒のタスク達成の確認方法

既におわかりのように、Picture Description も、生徒のタスク達成を確認するプロセスをしっかりと組み込んでいる。授業で picture description の作品を回収して確認し、更に既習の絵を用いて定期テストに picture description を出題することで再度確認している。

4.4 横山実践の特徴

この Picture Description は生徒に好評で、生徒はその成果を次のように伝えている。

自分の思うことを自由に表現できる。

英文を作ることが楽しくなった。

絵を見ただけで、英文が頭に浮かんでくるようになった。

しゃべることも楽になった。

生徒の作品を見ていて感心するのは、場面描写の個性の豊かさとユーモアの工夫である。これは、即興的口頭コミュニケーション活動だけではなかなか養えない能力である。「コミュニケーション活動」というとすぐに口頭コミュニケーションだけに偏りがちであるが、生徒は自分の語る内容をじっくりと考えたいという欲求をも持っている。コミュニケーション活動は、即興的発話を要求する活動と、じっくり考えを掘り下げて深みを要求する活動と、両方をバランスよく行いたい。その意味で picture description は貴重な実践である。

まとめ

よく実践報告などで、毎授業の最初に CS (conversation strategy) の表現リストをドリル練習させているという報告がある。しかし、それで生徒が実際の英語使用場面でそうした CS を駆使しているかという、あまりそうなっていないという。CS は、表現を暗記すれば使えるよう

になるといった、簡単なものではない。CS 暗記を、CS 行動へと発展させるためには、計画的な行動育成プログラムが必要である。

一方、研究授業などでよく、リサーチ型プロジェクトで生徒が自分の調べてきたことを壇上で英語で発表するのを見るが、基本的発表技術が育っていないために聴衆にほとんど伝わっていない。難語をそのまま乱発し、書き言葉の原稿にしがみつき、聴衆を置いてきぼりにしてひたすら朗読して終わる。また聴衆も、聞き手として参加するための訓練ができていないため、全く話に参加できずに、終始無反応のままである。このようなクラスに必要なのは、より入念な原稿指導というよりもむしろ、発表技術と CS 行動の計画的な育成プログラムである。そしてこのような行動育成は、時間をかけて行う必要がある。

このような発表技術と CS の行動育成プログラムとして、本稿では4つの継続的コミュニケーション活動を紹介した。この他にも、計画的にデザインし、何回ものトライアルを経て磨き上げてゆく継続的コミュニケーション活動に取り組む先生方がおられることと思う。今後もアンテナを高くして、そのような実践に学びたいと思う。

引用文献

- 足立智子 (2001) 'Classroom Interaction in the Japanese English Classroom'. 静岡大学教育学研究科修士論文
- 稲岡章代 (1995) 「第 1 章 2 節 はり絵を利用した自己表現活動」 樋口忠彦 (編著)『個性・創造性を引き出す英語授業』
- 藤沢 英 (2006) 'An Action Research on 10 Minute Daily Activities for Using All Four Language Skills'. 静岡大学教育学研究科修士論文
- 横山尋司 (2003) 「生徒が主体的に自己表現するための指導の工夫 ～絵を使った場面設定を通して～」日教組第 5 2 次教育研究全国集会報告書外国語教育編
- 横山尋司 <http://page.freemove.com/yokochanman2/> (2006 年 7 月 22 日ダウンロード)
- Dörnyei, Z. and S. Thurrell. (1994) 'Teaching conversational skills intensively: course content and rationale'. *ELT Journal* Volume 48/1 Oxford University Press.

資料：CONVERSATION STRATEGIES 一覧（筆者下線。Dornyei and Scott のリストに、筆者が加筆したもの）

1. Verbal strategies

- a. Controlling the speaker 自分にとって聞きやすいように、相手の話し方に注文をつける。

*Could you speak slower/louder/?*など

- b. ^{Dornyei & Scott による} Interactive strategies

<会話促進発言>

Backchannel *Uh huh, Yeah, I see.* など、あいづちにあたるもの

Filler *Well, Let me see, ur* など、時間稼ぎの埋め草

Rejoinder *[Thank you. —You are welcome] [Excuse me. ---Yes?] [I'm sorry. —That's all right.] [Nice to meet you---Really nice to meet you] [Have a good time. ---You, too.]*のように、決まりきった応答を瞬時に返す

Conversational Gambits(会話の定型表現)

話題切り出しの *The thing is . . . , You know what?*

感想 *That's great! (amazing/ wonderful/ interesting/ too bad/ awful/ terrible)*

I'm happy (sorry) to hear that.

(Keller, E. and S. T. Warner. 1988. *Conversation Gambits: Real English Conversation Practices*. Hove: Language Teaching Publications. を参照)

Complementing (ほめる) *That's a nice shirt!--Oh, really! / I like your tie. ---Thanks. Glad you like it. / Good to see you. ---Yes, really! /*

Empathic feedback 共感を込めて同じセリフを返すことで、相手への共感を示す。

"I am so discouraged. "---"Hmm. You are so discouraged. "

Plus-one information 相手の質問に答えるとき、答えの他にもう一文、情報を追加する。

Soliciting 相手に turn (発言権) を譲ることで、会話を促進しようとする。*What do you think? /How about you? /Do you have any ideas?*

< negotiation of meaning (意味交渉) >

Comprehension check 話し手が聞き手の理解を試すために発する質問

Do you understand? / Are you following me? / Is it clear? / Do you have any questions?

Confirmation check (含 asking for repetition) 自分が相手の発話をもっとよく理解するために発する質問、相手の発話の字面についての質問

What's that again? / I beg your pardon?

You want to borrow what?

How many?

How do you spell it?

Clarification request (Asking for clarification) 自分が相手の発話をもっとよく理解するために発する関連質問

*What does "*****" mean?*

Could you give me an example?

Forty or fourteen?

Paraphrase

的確な表現がみつけれない際に、説明や例示によって相手にわからせようとする *something you can ... with, a kind of ...*

Approximation

的確な表現がみつけれない際に、類似した意味の語で代用する *sailing boat* の代わりに *ship*、*turnip* の代わりに *vegetable* を代用する。また *stuff*、*thing*、*what-do-you-call-it* などの *all-purpose words* を使う

Rephrasing statements

Communication breakdown を察知した時、話者が相手にわかるように言い換えて話す

"You should go to the dermatologist's. "---"???"---"Go to the skin doctor's. "

Appeal for help

Communication breakdown が生じた時に相手に言語的援助を求める

What's the word for... ?

What do you call... ?

Interpretive summary

相手の話を正しく理解したかどうかを確かめるため、相手の発話を自分なりに要約して相手に返すこ

と

If I've understood correctly. . . , /So are you saying that. . . ? / You mean...?

Showing incomprehension 自分が相手の発話を理解できていないことをつたえる。 *I don't understand.*

Scaffolding 話し手の不完全な発話を、上級者が補って完成させてやる。

“How much is the ...school...you must pay...?. . . ”

“Tuition”

“Yes、 How much is the tuition?”

2. Nonverbal Strategies

mime (身振りで真似る)

gestures (ボディーランゲージ)

facial expressions

pointing (指差す)

drawing (簡単な絵を描いて見せる)

Negotiation of Meaning との関係

Nunan (1999:311)の定義では、negotiation of meaning(意味交渉)とは、

The interactional work done by speakers and listeners to ensure that they have a common understanding of the ongoing meanings in a discourse. Commonly used conversational strategies include comprehension checks、 confirmation checks、 clarification requests.

と定義される。上記リストで下線を付けたものがそれにあたると考えられる。